

銅板法華説相図 国宝

法華説相図と呼ばれるこの銅板は、白鳳時代（645～710 年）につくられたものであり、長谷寺の創設に関わる記述が記されている唯一の現存する資料である。686 年、道明という名の仏僧がこの板を鑄造し、法華經に登場する一場面を刻印し、三重塔とその他の多くの小さな仏像を描いた。病に倒れた天武天皇（631～686 年）の回復を祈願するため、この銅板は創建当時の長谷寺の本尊として祀られた。この建物は本堂から西に少し歩いたところに位置する小さなあずまやである。この銅板は、現在は奈良国立博物館に収蔵されており、長谷寺には創建時のレプリカが展示されている。